

## 先進的畜産経営のデータベース構築とそれを用いた大規模畜産経営の 経営行動・経営成果に関する実証分析

森 佳子

### 目 的

周知の通り、肉用牛肥育経営は農協の信用供与システムを通じ、農協との間に密接な金融取引慣行があり、当該経営にとって農協が極めて重要な取引先である。しかし近年、肉用牛肥育経営は急速に企業性格を帯びてきており、農協以外の取引先と取引をする経営が企業の経営を中心に出現してきている。肉用牛肥育経営の取引先は農協以外にも存在し、例えば、資金取引に関しては農林漁業金融公庫、市中銀行、民間企業との企業間信用等、生産諸資材・生産物販売の取引先に関しては、民間企業の存在がある。これら各種金融機関や民間企業との取引によって要する費用および得られる便益は、すべての肉用牛肥育経営にとって同一ではない。そのため、当該経営がどのような取引形態を選択するかは、当該経営における経営成果に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

本研究の目的は、企業の肉用牛経営を対象に、経営形態・取引形態の違いが経営成果に与える影響を定量的に明らかにすることである。本研究は以下の二つの特色を持つ。第一は、2つの属性、即ち経営形態（企業の経営か伝統的経営か）と、取引形態（様々な事業において農協と取引をしているか否か）を考慮して分析することである。農協の一部の事業では、他業態との競争が激化してきていることにより、特に企業の経営を中心として農協離れが生じてきているとされている。このような中、取引形態や経営形態の違う経営を、多様な側面から詳細にその実態を明らかにすることは、今後の農協に期待されている企業の経営への経営支援のあり方を議論するうえで、欠かすことのできない基礎資料を提供できる。第二は、本研究では独自に構築した長期パネルデータベースを使用して分析することである。現在、わが国では大規模な企業の農業経営に対するデータが非常に手薄であり、設定した課題に取り組むには量的にも質的にも分析に耐えるデータを作成する必要がある。本研究は、プールデータを利用した拙著（2003）を発展させ動的な分析を試みるものである。

### 方 法

本研究は以下の手順で行った。まず肉用牛経営の長期パネルデータベースを構築した。対象期間は農協・肉用牛経営双方にとって社会経済的環境の激しかった、1998年度から2002年度までである。本研究では、（社）中央畜産会が実施してきた大規模畜産経営に対する経営・技術実態調査結果を単にデータ化するだけでなく、マッチングアルゴリズムにより長期パネルデータベースを構築した。次に、構築したパネルデータベースを使って、経営形態・取引形態の違いが経営成果に与える影響を明らかにした。

### 分析結果と考察

本研究では、取引形態の違いによって経営成果が異なってくるという前提を置いた。それに従うと、取引形態の違いが経営成果に与える影響に関しては、JA型経営は商社型経営よりも収益性水準が低い、という結果が得られた。このことは、メインバンクである農協が必ずしも、常に肉用牛肥育経営に対する情報生産を行っているとは限らないことを示唆するものである。ただし、技術水準を表す増価格に関しては、JA型経営が商社型経営よりも高水準であること、また有意ではないものの総資産営業利益率の平均値に関しては、JA型経営が商社型経営よりも高水準であること、JA預託を行っている経営であっても高い収益性を達成している経営が存在すること等をふまれば、既述したように、かつて拙著（2003）が指摘した農協との取引と肉用牛肥育経営の経営成果との関係が、その後を検討している本研究では一部において改善されている、とみなすことができる。

### 引用文献

森 佳子（2003）『畜産経営の経営発展と農業金融』農林統計協会、東京。